



本間文庫
文庫 14
D 169











潮

夕

8

泡鳴子よ。われ此の室に止まること十有二年、初めより聲聞辟支佛の法を説くことを聞かず。たゞ菩薩の大慈大悲不可思議諸佛の法を聞く。此の室には、常に八の未曾有難得の法を現すとす。是れ維摩詰が舍利弗に誇りし語にはあらずや。

泡鳴子よ。十有幾年の間、此の詩に止まりしところの泡鳴子よ。謙遜を卑屈の別名とせば、子も亦一言を此の詩の爲に辨ずること、かの維摩詰の室に於けるが如くせざるべからず。然れども、子は之れを街衢として、破格として、遂に自から進んで、此の詩の爲に辨ぜざるべし。よし、よし。余は將に子に代りて、此の詩に八の未曾有難得の妙あることを辨ぜんとす。

曰く。何等をか八とす。一、此の詩には、金色の炎をもて照らして晝夜異なることなし、日月の所照も明とせず。二、此の詩には、常に聖靈満てり。讀むものは魔の爲に惱まされず、而かも惡を憎まず、却て調伏の勇猛

心を起す。三、此の詩には、ミューズ、グイナス等の諸神來會して絶えず。四、此の詩には、心眼乃ちよく見る、ロマンチズムの華咲いて灼爍、ミステリーの光耀きて燦爛。五、此の詩には、常に天人第一の樂の如く、絃なくして無量の變化の妙聲を出す。六、此の詩には、五の大藏あり、衆寶積滿、窮に周ねくして之を濟ひ、求むれば得て盡ることなし。七、此の詩には、ホルトロス、ダメテ、チコーサア、スベンサア、乃至シエータスピア、ゲーテ等の英靈、念ずるときは乃ち爲に來り、我が心深く歡喜す。八、此の詩には、一切の諸天、莊嚴の宮殿、無比の樂土、みなうちらに於て現す。

余は此の集を繙く人に、熟讀して、此の詩に入の難得の妙、有りや無しやを驗せられんことを欲するものなり。

明治三十七年暮秋

前田 林 外

岩野君足下。

足下の知れる如く、余の最も嫌ふ所はかの『文士』『小説家』なるものにして、彼等の多くは哲理を知らず、學なく識なく徒らに文字を臆列し、美辭麗句集のものを作るを善くし、而も神經過敏にして、小感情に刺擧され易く、婦人小兒の毀譽に喜憂せり。之れを以つて高尚なる知性及び理想の點よりする時は、彼等は劣等階級の者たるに過ぎざるなり。彼等自ら稱して文士と謂ふ。然りと雖、其精神や士に非ずして筆民のみ。自己も他人も、之を『小説』家と謂ふ、之れ當れり。決して『大』説家には非ざるなり。

岩野君足下、詩人亦此傾向のもの多きは、詩人たる君と雖、敢て否むこと能はざる事實なるべく、故に余が『詩人』に對しても、餘りに大なる尊敬を

表せざるも、決して無理なりと爲さざるべし。然るに今回君は詩集を出版せんとして、一言を余に徴す、余豈惑はざるを得んや。余は多くの所謂文士等か爲す所に倣ひ、序文的の御世辭を足下に呈せんか、悲しいかな、余の筆に御世辭の蓄藏なきなり。御世辭はたとひ之れなしとも、余の希望は之れを述ぶるは難事に非ず。而して『大神ゼウス若しグレシア語を以つて語るとせば、必ずやプラトーンの語を以てせん』との評ある、プラトーンが言の意味を借りて云はんか、曰く『かの文章以上に超脱すること能はず、辭句を弄し、或は補綴し、或は切斷し、或は加へ、或は減ずることを爲すが如きの輩は、當然詩人、修辭家と稱すべきのみ』と。詩人を輕視せる此くの如し。然りと雖又た曰く『若し彼等眞理に基づきてもものする時は、單に詩人修辭家たるのみに非ずして、眞面目なる其目的に相應せる、一層高尚なる名稱を値すと云ふべし』と。其名稱とは何ぞや、曰く『哲學者』之れなり。

岩野君足下、余が現今の詩人等の、眞にプラトーンの輕蔑したる如きもの

にして、眞理、善美、理想等の念なき者多しと感じたるは誤れりと爲すか。敢て君の詩がプラトーンの云へる如き『哲學者』の心より出づるものなるを希望し、又た君は現今多數の詩人等に伍することを潔とせざる者たることを信す。

明治三十七年十一月十八日

木村 鷹 太郎

新聲を試むるは難く、舊調を守るは易き世の常とて、名は新體の詩人と稱ふるも、調古るく想淺く、今の世の進みたる知歌よりもはるか後れたるものあり。自然の清興、人心の機微にいたり深く、朗詠のあひだ、しみじみと覺ゆるものなくば、その歌は唯覺束なき徒然のすさびなるべし。さらぬきは、の作に至りても、あるは童部の夢のやうに淡く臙ろげに、あるはわかうどのあげつらひめきて、思ひあがりたる雄語の、あまりにうひ／＼しきは如何に。嚴をかなる人生の道に遠ざかりたればなり。切なる世態の眞に觸れざればなり。古のリュビアの力士アンタイオスは足、土を離れざるかぎり力衰ふること無かりきといふ。清新の文學に民謡の復活を見、古今の名歌もほくは、所謂をりにふれたる作なるもこの故ならむ。詩集夕潮の上梓に際し、聊か思ふところを述べて著者に寄す。

明治三十七年十一月

上

田

敏

泡鳴君足下。

君の名は、美術、余の名は、芳術。名、既に縁あり。余や、交遊多からず。その多からざるが中に、性格の似よりたるものは、君の外に、また之を求むべからず。その性格の似寄りたるの點は、兩心相知る。余今こゝに之をのべず。その外、身体の清瘦も相似たり。酒をのむことも相似たり。暮をうつことも相似たり。旅行を好むことも、相似たり。新體詩を好むことも、相似たり。たゞ、年齢に於て、余は君の兄なるが如く、暮や、酒量や、脚の健なることや、同じく兄也。されど、新體詩を作ることに於ては、余は弟たらざるを得ず。とにかく、あらゆる點に於て、兄弟也、否、異體同人也。然らば則ち、君の詩は、余の詩也。君の詩集成るは、余の詩集

成る也。君の詩集成らむ時、請ふ携へ来て、余が柏木の閑居を訪へ、共に酒をのみ、暮を圍みて、久しぶりにて、一日の閑を銷せむ。

明治三十七年十一月

大町桂月

このふとほはのが第二の詩集なり。されど、東都に於て公にするは、之を以ては、まゝる。すなはち木村鷹太郎、前田林外、上田敏大町桂月の諸兄、各平生の言を寄せて、これを鼓舞鞭撻す。感謝せざるを得んや。こゝに之を掲げて、巻頭の冠とし、かたがた以て此詩集の發途をおくる。

無天詩集にて

著者識

目次

女護海島……………一
世外の獨白……………一六
磯姫の曲……………二〇
無性斗神……………二五
嫦娥のうらみ……………三二
海邊雜吟(上)……………三二
前田林外君に……………三四
海のなげき……………三八
君を思ひて……………四〇
わが影法師……………四〇

いさり火……………四二
蟹に寄す……………四四
高岸沈思(鷹太郎木村君に)……………四六
海邊雜吟(下)……………五〇
朝出船……………五二
朝の夢……………五二
あしたの神……………五五
秘戀……………五七
倉吉……………五八
夏の眞晝……………六〇
夕べの神……………六一
高安月郊君に……………六三
遠つ鳥根(蒲原有明君に)……………六三

御富士(兒玉花外君に)	六五
あゝ世の歡樂	六八
湖畔の靜思	七〇
圓き石	八八
島の歌	九三
有木の別所(成經が獨語)	九七
散り行く紅葉	一〇六
天の橋立にて	一〇九
蕈と少女	一一三
秋吟(雨中に立ちて)	一一六
二の笛	一一八

豊太閤 (史詩)

戦捷の祈	一二三
清正望岳賦	一二二
明使追放	一三七
蔚山城	一四四
秀吉薨去	一四七
小海祠	一五五



挿畫及表紙畫

青木

繁

海底の神

表紙

發作

一

渾沌

四〇

神秘

八六

本然

一一三

ゆ
ふ
ト
は

岩
野
泡
鳴
作

女
護
海
島

序

白帆しろはは 遙はるかに 戀こひしき ものよ、
をとこは 心こころに 頼たのみ の 綱つなか。
大おほぶね 入いり込こむ その ゆふぐれ に、

きそひて 出て来る 鳥人どもの
化粧 は あらたの 黒がみ姿
優しき 手に 手に 持つ わら杓を、
湊 の みぎは に ならべも立てつ。
之をば うがたん にひ鳥もりの
結べる 小紐 の しるしに すがり、
おのこの 分れて みさを を 守る。
ああ、とこしへにも 生きなん ものが、
一夜 を いただくは 如何なる さちぞ。
すなはち、頼み の とも綱 切れて、
その船 遠くも 歸へらん 日 には、
歎きの 涙 に その身 は なかば

融けて や 深みの 人魚 と ならん。

(一)

颯々乎 として 風 吹き来れば、
みなぎる 大洋 二十重 に 倒れ、
颯々乎 として 浪 逆まけば、
そびゆる 椰子樹 も かゞみて 恐る。
岸べ に あらぶる 獅子 とは 何ぞ。
見よ、見よ。巖石 ぬれにぞ 濡れて、
かしら を 擧ぐるは 活くる に 似たり。
この鳥 まとふは 如何なる 蛇 ぞや、
しり尾 も 示めさず 動くに遇へば、

天柱 やすきをこれ 疑はる。
幾千百丈 みな底 深き
神秘 の 奥 より ゆるぎも出てつ、
ああ、茫漠たる そら をば 仰ぎ、
いと さしやかなる、 汝、海島 よ。
なが身 を 護るは アダム の 子ら か、
はた又 いづくの 流人 が するぞ。
静中 動 あり、動中 静 の、
寂寞 却て 一しほ 深し。
山にも、川にも、森にも、野にも、
住へる ものらの 影 だに 見えず。

(二)

山々 みどりの 眉 をば 染めて、
白きは 御空 の ひたひ に 残る。
流れ は 香樹 の にほひ を 乗せて、
ゆるくも 走りて おほ海 に入る。
野べ には 鳥 あり、その名 を 知らず、
自由に 眠りて 羽がひ を やすむ。
大獣 小畜 小みち に 遇へど、
その牙 その爪 用 をも 爲さず。
喬木 灌木 こずゑ は たわわ、
露けき 果物 食ふに まかす。

空氣は稀なる力を帯びて、
天なる御門ゆ涼しく流れ、
かじやき照らすよ、小草の色
青きはあまねく地上に敷きて、
文化の足跡少しも受けず。
遠きも近きも、左も右も、
自然のけしきは活き活き踊る。
ああ、これ仙境——無名の主の
青牛ゆたかに關より逃れ、
悠悠天壽を終へにし陸か。

(三)

晝夜は分れてこの地を見舞ひ、
風雨と戯れ、無手にて歸り、
變化は隠れてこゝにも來れど、
歴日あまりにもの長ければ、
天數地數の八卦にのらず。
剛柔いまだに交はらざれば、
難をば生ぜぬ有様なるか。
物皆おのづと成り出でぬれば、
遠近ともども鋤鎌取りて、
たがへす勞苦はいづこにありや。
うれひの主體をとどめぬ限り、
造化の所有に身づからなやみ、

火宅くわたくを現げんずるものらはいづこ。
有形うけがらのほだしを遙はるかに去さりて、
無形むけいの位くらゐに融ゆう合がうするか。
谷たになく、悔くゐなく、思おもはず、爲なさぬ、
草木くさきに牝馬ひんばのいのちを繫つなぎ、
優やさしく健つよきはかげのみ走る。
ああ、生せい々の理り孤獨こどくとなりて、
いつまで、化育くわいくのいといと高たかき
對象めいさうを別わかちて男子なんしと成なさぬ。
雲くも行き雨あめふるこの島山しまやまに、
六龍りくりゅう遂つひには顯あらはれざりや。

(四)

そも何なにものぞや、音樂おんがくのごと、
なみ風かぜ静しづまる刹那せつなと刹那せつな、
そのひまかすめて幽かすかに聽きこゆ。
山やまにはその山やま、川かはには川かはの、
おのおの發はつする御魂みたまもあらん、
鳥とりにはその鳥とり、獸じゅうには獸じゅうの、
それぞれ固有こいうのこわ音ねもあるを。
そも何なにものぞや、音樂おんがくのごと、
なみ風かぜかすめて幽かすかに聽きこゆ。
その方向ほうこうさへ確しかとはわかず、

たつみに 向へば たつみに 渡り、
いぬるに 向へば いぬるに ひどく。
魑魅 罔兩 とは これをや 云はん。
見よ、見る 限りは、とこ世の 夏の
枝葉 は やわらか、その水 清し。
精魂 豈、また、若やがざらん。
剛健 頗る 自然 に かなふ、
椰子の樹、棕櫚の樹、あなゝす、ざぼん、
芭蕉の 葉かげ に、蘇鐵 の もとに、
たとへば、あれ野の かしこに こゝに、
虫の音 一時に 高まる 如く、
恨む か、歎く か、かこつ か、泣くか、

悲しく 哀れに 聴こも來たる、
調べ は をちこち 一つの ひどき。

(五)

ギリシヤの いにしへ 船人ども を
いざなふ 島根 の それにも 似てよ、
へだて、聴きなば 怪しき ひどき、
めあて を 定めて 近づき 見よや。
住民 ありけり——サイレン の ごと、
美なる は をんな の 機織りすがた。
前者 は、オルファス 琴引き の 爲め、
巧みを 耻ぢ入り 移石 と 化しぬ。

後者は、却て、海より來たる
慰藉をば求めて心は亂れ、
炎熱烈しき樹のかげかげに、
無聊に倦みてぞ織り出す布の、
長さが如くに夏の日盡さず。
まなこを横ざる梭の手ゆるく、
逃れて出づるは夢路のうつゝ。
せめてはそのまゝ、眠りに入らば、
目ざめて苦しき煩悶もなきに――
かよわき力の渠等ぞあはれ。
うつゝと夢路の境にありて、
われからとめ得ぬ歌をも、杼をも、

ねむげに合せて又くり返へす。

『はた地は織れども、着る人あらず、
着る人あれども、をみな子ばかり。』

(六)

日本の荒武者爲朝、ひかし、
この根を襲ひて、美なるを多く
小舟に引きゐて南に去りぬ。
これ、この處の唯一の歴史。
祖先はいづれぞ。開祖は誰ぞや。
文明あかるき光を惜み、
學術その口つぐみて云はず、

木訥 平易 は、神代の如し。

小波 に尋ねば、小波は隠れ、

大浪 招げば、大浪にけん。

こずゑ に訴へば、こずゑはゆらぎ、

木の實 に語れば、木の實は落ちん。

ああ、單調子の安逸、安臥、

無理想、無何有に、勞れも果てつ。

小蜘蛛の織り爲す網になぞらへて、

芭蕉布 作るが手足の動き、

なほ飽き足らざる心の糧よ――

いづこの果よりなぐさめ來たる。

運命トする卦はたゞ潜み、

牝馬は空しくいな鳴くばかり。

島民とこ世にその數あまた、

柔順 さながら配偶を得ず。

さびしきその身をいだけば、胸に

燃え立つほのほの暑さに堪へず、

南の岸べに冷氣を呼べば、

天地はかをりて感ある乙女。

ああ、また同性、同性を産む。

世外の獨白

(一) 磯姫の曲

岩いに あら波なみ 音ねぞ 高く、
朝日あさひのぼりて こゝろ 寂さびし。
われは いづこの 果はたを 來きたり、
われは いづこの 果はたに 行ゆくや。

かぎり 知られぬ 濱はまは、東ひがし
西にしに のび行く 晝ひるの 如ごとし。

みどり 黒くろがみ 白しろき 越こえて、
せなに 亂みだるゝ あらし 烈はげし。

ぬれし 砂地すなぢに わが 素足すあしの
落ちて、一すぢ 引ひくは うれひ、
遠とほき 波なみより 消きえも行ゆきて、
更さらに よせ來くる 波なみの うねり。

われは 友ともなく 此世こよの 岸きしに
立てば、かなしみ うしほ 成なして、
あはれ、いづこの 果はたを 來きたり、
あはれ、いづこの 果はたに 行ゆくや。

胸も だよめく 海の音の
凝りし いはほの 上に すはり、
沈む ゆふ日の 光 見れば、
ひとり わが身の かげぞ 薄き。

見よや、すなだる人の 子らは、
かたへ よぎりて 家路 行けど、
われは 磯姫、ひとり 残り、
わらひ さゞめく 目には 入らず。

夜の氣 落ち來て この世 つゝみ、

萬物 ねむりに 入らん 時も、
われは とこ世に こゝろ 醒めて、
沖の ふるさと 胸に ゑがく。

あはれ、深みの あわび貝よ。
なれが 住まひは くらく あれど、
かなしみも なく、憂さも 見えず、
あるが まゝなる すがた 戀し。

われも 生れは 海路 なれど、
母を見知らず、父を 知らず、
めぐる 月日の しほに 浮きて、

かくも 夜る晝 やすきを 得ず。

岩に あら波 音ぞ 高く、
朝日の ぼりて こゝろ 寂し。
われは 深みの 底を 出で、
またも うれひの 深き 知りぬ。

(二) 無性斗神

ああ、われ、大地の 御胎に ありて、
をのこ と 生まるゝ わづらひ 免がれ、
ああ、われ、御つちを 母とし 出で、

をみな と 歌はる 恥ぢをば 避けつ。

見よ、世の 強きは、夜を 日に 繼いで、
名利の 爲めには おのれを 忘る。
見よ、世の 弱きは、あしたに ゆふに、
おのれを 折りても かたち に 耽ける。

見よ、世の 猛きは、春 また 秋に、
虎の子 熊の子 輪廻の もとる。
見よ、世の 美なるは、年 また 年に、
直立種族の 種をば 殖やす。

人こそ知らざれ、その子の脊には
大なる毛ものの這ひあがれるを。
人こそ知らざれ、その子の手には
毛深き前足つさまとへるを。

いな、いな、知らざれ、その子の父母も
もとより一つの道をば這ひつゝ
月日の如くに今分るれど、
もとこれ谷間のしゝの子猪の子。

互ひにまろびていただくは何ぞ、
おのれの生みにしおのれの姿

影より影をば樂み活くる
人間、あはれや、その身を知らず。

ああ、この燦たる世界にありて、
なほ且人の世いかでか醒めぬ。
見にくき髪の毛かしらにのせて、
いつまでまよひの御殿にねむる。

見よ、わがむくろは大地に成れど、
恥ぢあり、名あるのさぬをば着けず、
小暗き森より踊りも出て、
われをばいだきて御空のきはみ。

ゆふべにほゑむわがかじやきは
し、射る人らの真弓を照らし、
朝げにまたくわがまなざしは
軒端につるせる獲物にうつる。

あはれや、人間、その日を狩りて、
明日はもわが矢にうたれて死なむ。
両性相待つその夢の間は、
再びわが目に觸るゝを避けよ。

(三) 嫦娥の恨

西水 また行く 三百五十里、

かの 西王母 ぞ わが恨み なる。

玉山 出だす は 壁 のみ なりせば、

磨きて わが手に 巻くべき ものを、

不老 の くすりに 不死なる かをり ぞ

わが身 を あざむき あやまたしめぬ。

かの神 蓬頭の 姿 を あらはし、
くすしき 賜物 わがつま 羿 に

授けしその夜ぞ、われ、世を思へば、
世人も同じくその伴がらか、
獣にも等しき髪の毛いたゞき、
死ぬれば長き尾示めすと見えぬ。

妙なる世界ぞひたすらくゆりて、
いとほがらかななるつき夜の如し。
わが世を忘れつ、わがつま忘れつ、
またおのれをさへ忘れて、あはれ、
たゞかの薬の節匣をいだきて、
高ぞら御殿に逃げこそ來つれ。

御空は燦爛、星、花降らして、
真晝の光に錦を飾ざし、
黄金まばゆきうてなのうちには、
手枕しばしの夢、幾むすび。
さは云へ、わが魂、たゞ一ときだも
やすきを得たるのためしはあらず。

あま飛ぶおほ鳥、小鳥の羽がひは、
羽ばたき毎にも眞玉をはたき、
碧緑は露とも散り布く晴れ庭、
あまたの腰元薄ぎぬにほふ。
さは云へ、わがたま、たゞ一ときだも

やすきを 得たる の ためし は あらず。

萬燭 皓々 しら雪 はぢらひ、

夜を さへ 晝間の 不老の 宮の、

とばり は 紫、その色 深くも、

かをりて おぼゆる 不死なる いのち。

さは云へ、わがたま、たゞ 一とき だも

やすきを 得たる の ためし は あらず。

ああ、汝、しら雲——もろきは しら雲。

却つて 戀しき なんぢの すがた、

五色の 光に かさなり 合ひつゝ、

先きなる 影より 消え行く さまは、

たとへば あかつき、熟睡の 床より、

暖夢 つぎつぎ のがるゝ 如し。

わが身も、歡樂 あまきが 如くに、

ほろびて またまた 生まるゝならば、

寂しみ 非想の 天まで 積むとも、

苦しき 思ひの とどまるまじを。

わが壽 は、三千三百歳 をも

刹那に かぞへて、なほ 盡さざる よ。

涙に あふるゝ 下界を 離れて、

却つて 苦しみ 一しほ 増しぬ。

なまじい 久遠に のろみ を 求めて、

得たる は 空しき つき夜の くらゐ。

澄みては、むらがる とこ世の 暗黒を、

こゝろ は 孤寂の あし場に 迷ふ。

無限の 刹那の その數 かぞへて、

わが胸 おそれ に おのゝき 震ひ――

見よ、やみ 遠くも 見え透く 雲間 ゆ、

聲なく 刻める うれひ は 迫る。

ああ、この いのち は うつろ の 酒饗、

永劫 わが魂 ねむりを 盛らず。

西水 また 行く 三百五十里、

かの 西王母 ぞ わが恨み なる。

玉山 出だす は 壁 のみ なりせば、

磨きて わが手に 巻くべき ものを、

不老の 薬に 不死なる かをり ぞ

わが身 を あざむき あやまたしめぬ。

海邊雜吟(上)

(一) 前田林外君に

君きみとふたりたどりし
濱はまべに出いで、けふ、又また
ゆるき浪なみをながめて、
こゝろ動うごく夕ゆふかた。
君きみが行いきしふな路ぢは
岩井いはいの鼻はなより消きえ、

遠とほき富士ふじのすがたを
夜よぎりとざす小入こいり江え。

つかれ歸かへる漁夫ぎよふらの
船ふねは見みえぬ櫓うの音ね、
あはれ、寂じやくとして、たい
有あるは月つきとわが事こと。

ひかる海うみを渡わたりて、
吹ふきぞ來きたるすゝ風かぜ、
あびて立たてば、胸むねには
悲喜ひきのおもひかきませ。

廣く、暗く、あかるき、
噫、この海の おも 見よ、
君と むかし語りの
戀も 斯の如き よ。

(二) 海のなげき

富士の あなたに 夕ばえ 消えて、
せなに 夜神の 迫りを來たる、
わが身 ひとりの 濱べに 立ちて
海の なげきを 窃かに 聽けば、

これも いためる 有情の 言葉――

『日々に 思へば、思は まする、
まさる 思の 深さを つゝむ
胸は、あらしに かし亂されて、
やすむ ひまなき 迷の影の、
暗き うれひ は いのちの 底に
清き 眞珠の 眞玉を 産みて、
人に 示さぬ この 秘め事よ。』

『秘して つゝみて、つゝみて 秘して、
ゆるく 満ち張る 浪より 浪に

天はうつれど、照る日は照れど、
とけて流るゝ光の奥は
いつもやみ路の力に振ふ。
夜々の星々その数あまた、
沈むとし月限りも知らず。

『みどり混沌よどむがうちに
活きて踊りて、且、悲みの
過去も一つに、未来もここに、
今を盛りの満干の潮は
潮のいづこにはてしを得んか。
亡ぶものこそうらやましけれ、

いつか心の憂さをば晴らす。

『やまと建が立花姫を
近く沈めて、遠くもいにし、
昔がたりの勇氣を鼓して、
いたく忍べはしのぶに餘る。
ゆふべ寂しくひろがるおももの
恨み、無限の浪間に渡り、
浅きみぎはに寄せては返す。』

あはれ、とこ世に若ゆる海よ。
海よ、わが身となやみを分て。

あたり 静かに、山々 黒き、
空に 残るは 三日月 ばかり。
『戀』と 真砂に 指もて 書けば、
白き 小浪は 手を さし延ばし、
さつと ぬぐひて 引きしりをさぬ。

(三) 君を思ひて

君を思ひて 濱べを行けば、
濱の 真砂の 敷さへ かさむ。
わが身も かくや 碎け行く。

君を思ひて なぎさに 立てば、
浪の うねりの 道こそ あはれ。
わが身も かくや 消えて行く。

君を思ひて 三日月 見れば、
暗き 磯わの 音にも 響く。
わが身も かくや 細り行く。

行きも やられず、去りもし えせず、
まどふ 心に いさり火もゆる。
わが身も 遠く 浮ぶ身か。

君を思ひて筆すみ執れど、
苦吟一夜さ詩の句を爲さず。
ああ、われ若き戀やする。

(四) わが影法師

われ行けば、かれも行くなり。
われ立てば、かれもとどまる。
月かげに、夜のごと黒く、
投げ出だす二間の法師、
浪あらふ砂平らかに
よこたふる二間の法師。

振ると見ば、振るへころすれ。
ゆると見ば、ゆれても見ゆる。
その頭潮にうつして、
潮いまだ浸し能はず。
その足に蟹這ひ寄れど、
蟹かつて攀ぢもし得せず。
すそ長く引くは、貴とさ
神わざか、はた海靈か。
いづこなる國の秘密を
身にもちて、ひそみや來けん。
たゞ無言、われに従ひ、
松原を見えつ隠れつ。

わが宿にのぼりを來たる。

(五) いさり火

おほ浪 靜かに 眠りに 入りて
ゆめ路 にかじやく 光の 如く、
小星の つき夜に まぎれて 浮ぶ
その火よ、何もの、見えては 消ゆる。

み冬の 夜ならば、氷を 踏みて、
山より 出て來る 魔性のものが、
藁火を ともして 海べを 渡り、

獲物を あさる に さも 似る影よ。

三更 ふけ行く 自然の あなた、
無よりや 産る、世界の 如く、
明滅 起滅の 境に ありて、
なほ且 燃ゆる は 如何なる 熱ぞ。

すなはち、東の 戸びら ず なかば
開けて、眞白き 馬毛を 吐けば、
おほ空 別れて、浪間を 遙か
歸るは 小黒き 釣り船、小船。

先なる ひじき も、あとなる 音も、
神矢の 如くに 亂れず 寄り來。
なぎさに 立てるは 娘か、妻か—
みよしの 左右を いだきて 迎ふ。

(六) 蟹に寄す

夏の 眞晝 暑さを
海に 去るは 大いを、
寄せて 返す 浪間に
のがれ出る は この蟹。

軽く 砂を よこ這ひ、
苦をも 知らぬ 行きかひ、
大いなる を あざけり、
ちさき まゝに 氣満てり。

世にも 奇しき 餌を 食み、
ちから 強き 小ばさみ。
なれ、藝術に 身を入れ、
立てば 玉をこそ 切れ。

ひろき 濱を 迷はず、
長き 日 をば あせらず、

人目 遠き ぼそ穴、
おのが道を 追ふ かな。

(七) 高岸沈思

(鷹太郎木村君に)

高き 岸べに うち出で、
洋々の 浪 見渡せば、
秋の 初風 身に 吹きて、
歸京の ころ 動く かな。

見よや、大海 目もはるに

あま照る 光 照らすとも、
威名 天下に 赫々の
偉人に 比して、いづれ ぞや。

見よや、白雲 北に 湧き、
なか空 さして 登るとも、
代々の 亂軍 きり抜けて
ろの名 を 擧ぐる 雄者 あり。

如何に 沖への 暴風 は
阿修羅 の 如く たけるとも、
一夫 をどつて 泰平 の

政治を亂だす たとへのみ。

怒濤二十重に 捲き倒れ、

大地のもとを ゆするとも、
立ちて 静かに ほゝるむは、
いづれの 流の 哲士ぞや。

見よや、よろづの 神々を

産みてし うしほ 渦と化し、
めぐる 無間の 上をさへ
ひと葉の 船は 渡るなり。

あはれ、自然を のり越えて、
自然に 歸るものは 誰ぞ。
人は むくろを 解脱して、
あらたに 人の わざを知る。

いまだ 功名 投げうたず――

いな、いな、骨にとほる まて、
海の うしほの 若やぎて、
いかれよ、鳴れよ、とどろけよ。

高き 岸べに うち出て、
洋々の 浪 見渡せば、



あまた 有情の泡 立ちて、
君 住む 京ぞ 忍ばるゝ。

海邊雜吟(下)

(一) 朝出船

御富士のいたゞき おもてを拭ひ、
たな引く貫抜き 左右に揺れば、
世びとは 短き夢より醒めて、
濱邊は 忽ち 歡呼のひゞき。

空^{くわき}氣^き は 新^{あら}たの いのちを 傳^{つた}へ、
眞^ま砂^さ は 平^{ひら}らか 清^{きよ}さを 誇^{ほこ}る。
男^{おとこ}波^{なみ} は 馳^はせ來^きつ、女^め波^{なみ} は 招^{まね}き、
出^で船^{ふね} の よろひを 待^{まち}てる に 似^にたり。

もと、これ、鍛^{きた}へし からだと 腕^{うで}に、
海^{うみ}をば おのれの 家^{いへ}とも する 子^こ。
もと、これ、手^て馴^なれし たぐみに 依^よりて、
ろの足^{あし} 軽^{かろ}くも 作^{つく}れる 小^せ船^{ふね}。

『えいや』の かけ聲^{こゑ} ちからを 呼^よびて、

押し出す 獵船、勇める 親子の
ちいさき 世界に 朝日を 浴びて、
浪間の 奥へと 遠くも 消えぬ。

(二) 朝の夢

夜網引の 朝ぶね 着さぬ、
勇む は たゞに 魚ならず、
人々の 罵る聲に、
寄せ来る 波も さほひ あり。

夜もすがら あさりし 獲物、

小砂の 上に うち撒けば、
跳ね飛ぶ は 大鯛、小鯛、
甲頭魚、三島、かながしら。

いろくづに 賑ひ初むる、
見よ、大濱の 西ひがし、
左には サフランの 雲、
右には 富士の 新よろひ。

この世界 唯一の 寶、
いよいよ 光放つ をば、
相應しき 値踏み や せんと、

いづこよ 來たる 人あまた。

朝日 照る 砂山 越えて、

丸籠 擔ぐ かけ 長く――

その昔、ユダヤの野邊を、

水がめ 運ぶ女の如し。

つぎつぎへ 現はれ 來たる

その影 計へ 立たずめば、

物思ふ わが身は 今や

太古の夏の夢に入る。

(三) あしたの神

富士のいたゞき 赤らむは、

あしたの神の露拂ひ、

東の網を地引きする

網に明け行く 濱邊かな。

(四) 秘戀

浪の上に日のかけ、

落つる朝のすゞ風、

われは 濱べ さまよひ、
よべの 夢の あと追ひ。

砂の上 君が 名、

かさね 書くも おろかや、

とても 遂げぬ 秘め戀、

白き泡 の よそほひ。

海に 浮かば、この胸

獲物 なきの 釣り船

陸に あらば、この魂

行く手 知らぬ あり様。

見えて のぼる いとゆふ、

あはれ、熱き 血を 吸ふ。

われは 身をば 横たへ、

けふも いたく 小悶へ。

(五) 倉 吉

倉が お歳 は まだ 十六 と、

三十三 の 澄ました 男、

われも 詩に 飽く 時あらば、

君が心 に 歸りたや。

(六) 夏の眞晝

夏の眞晝、譬へば
白きをんなのむくろ、
立てば、四尺七寸、
光放つ眞うつろ。

みどりの髪ふくよか、
熱き風に解ければ、
焼けし砂の上にも
ありきや、誇の餌ば。

玉の如き心の
堅に延べしその影、
世びとの目にうつらて、
あまつ御空追ひたげ。

日より生れ、その日に
焦れ行くはなが戀、
幾萬億里のぼりて、
身をや揺するかげろひ。

あはれ、どよむ深みを

涌きぞ出でし テチスよ、
わが目 映ゆき 間に、

なが 御すがた 見たるよ。

(七) 夕べの神

とんぼ 釣る子 の かしら をば
夕べの神 は ろと 越えて、
そよげる 蘆の 一葉 より
ちのづと 暮るゝ 河邊 かな。

(八) 高安月郊君に

寄せては 返す 白浪、

ひびき も 更けて、三日月

横さに 照らす 海のも、

平らか なるよ わが胸。

凄きを 獨り 忍びて、

光は 青く 消え行く

心の空 に 住まへば、

濱邊 も 遂に みな底。

かの世に耳を澄まして、
亡き人々を招けば、
かたちは見えずその聲、
至るに遠しその岸。

立たずむ足を洗はれ、
はじめてわれに歸りぬ。
さればぞ、西の都に、
清雅の詩人今如何。

(九) 遠つ島根

(有明君に)

遠津海遙かにかすみに入り、
かすみの奥よりかしらを擧げ、
沈思に耽りしそのほこりを
ほのかに示めすか、大島が根。

吹き来るしほ風なまぬるくて、
南の熱さをこなたぞ知る。
七重のしき波寄せ來りて、

海路の響きをこゝにぞ聴く。

戀しの姿や、ろれ、静かに
ひじりが御胸に映れるごと、
その身のなかばを深みに籠め、
みどりの冠を御空のはて。

ああ、そのみどりは轟く浪、
はためく御空の間に浮き、
眠れる如きのその島根を
ゆふ霽包むにまだ早さよ。

行きにし御霊の住ひに似て、
平安の溢る、墓場やある。
世の物思ひの群がる時、
心の船出し、君と行かん。

(十) 御富士

(花外君に)

わが世のつとめをけふも終へて、
濱邊にうち出で富士を見れば、
御富士は寂しきかしら舉げて、
わづらひ解脱の神に似たり。

ゆふ日の光は遠く沈み、
その薄むらさき雲を疊み、
ああ、なぎ渡れる深き空に
輪廓正しき峰のさまよ。

ゆるがぬ力をゆふべに染め、
いよいよさわ立つその御姿、
とどろく水際に心澄めば、
いよいよ貴ときその居すまひ。

高さに浮びて、とこしなへの

あま照るやすらひ、實にもそれか。
ゆふぐれ静かに隠れ行きて、
わが身に残すはいこひの影。

われ、今、茅ヶ崎、詩神追ひて、
心を小暗き波に碎く、
君、去年、甲州、山路行きて、
御山のすがたを如何に見しや。

ああ世の歡樂

ああ、世の 歡樂 あまきに 過ぎて、
夢路 に またがる 春、その うつつ、
遠きは 薄もや、近きは 花の
ねむり か、心の まなこ を めぐる。

それ、たゞ しきりに 降る ほそ雨の
窓 には、そとろの 戀 もや 秘めん。
それ、たゞ 曇りて 吹く やわ風に、
浮き立つ 思の いこひ や 住まん。

ああ、とこ静かの 春、その うつつ、
うつろ の まぼろし あしたに 破ぶれ、
大地 は 音なき ほろび の かけを
一ひら 胡蝶の 羽がひ に まかす。

若き身 もたげて わが世を 追へば、
ああ、亡き 乙女よ、見えては 消ゆる。

湖畔の静思

(一)

琵琶のうみづら 風なきて、
雲一片の往き來だに、
悟りを得たる山人の
やすきに増して見ゆるかな。

青き御空の日の丸も
融けては、こゝに形なく。

高き山邊も静きては、
そのこゝしさを失ひつ。

浅きに似ても、淺からで、
底に達せぬ天の色、
暗きが如く、暗からで、
うちに輝くその光。

神代分れしその昔、
寂しく照らすエーテルの、
上下左右を現はさて、
空に満ちけん有様よ。

追ふて 限りは 知らねども、
廣きが うちに 平和あり、
つかみて 手には 残らねど、
平和の うちに いのち あり。

歌の ひじりが 筆取りて
ながめし、水の とこしへに
よどむ、力の うしろには、
深き 御かげ ぞ 動くなる。

(二)

われ、端なくも、詩の界
乗りて 來りし 一葉舟、
軽く 浮びて 物もへば、
うれひに 延ぶる いかり綱。

下に 向ひて 沈み行く、
長き おもりに 底 觸れて、
をどり出づる は、龍の宮、
龍が さぐる 玉ならず。

また、かの 燃ゆる 思をば
眞あかの 紐に つなぎ合ひ、

この世の苦をば逃れけん、
むくろのひとつにもあらず。

はた又、深き岩かげの
下界に、つとくほら穴に、
紫紺の實をば結ぶてふ、
万年青の若葉、それならず。

探ぐる目あてのあらばこそ、
かぢ取り直す身にもなれ。
浪のまゝなるわが思、
迷ふがまゝの西、東。

混沌 いまだ開けずば、
昔のさまに歸るなり、
無念無想の海の上、
たゞよふわれも、はた舟も。

(三)

水のおもより立ち登る
あしたの虹の棚引かば、
晴れし御空の長橋は
長等の山を越えんとし。

野州の松原 ゆふぐれの
虹 あらはるゝ その時は、
落ち来る雁の列 ならで、
堅田のせとを うち渡り。

香取が浦の かぢ枕、
浮き寐の鳥の羽根のごと、
七色あびる 小蒸氣の
一つ二つも 静かなり。

ああ、なやみ ある われも 亦、
まなこ と 共に 延び行きて、

くれなる 薄さ 綾絹の
つゝむが まゝに 消ぬん かな。

(四)

われ、長濱の岸べより、
西に うすづく 日を見れば、
その 光線に 送られて、
みよしを 立つる 帆かけ船。

その影 小さし、遠ければ、
その足 遅し、廣ければ、
その聲 聴かず、隔たれば、

その帆ほ 光ひかりるよ、白しろければ。

たゞ 沖合おきあひに とどまりて、
行くか、歸かへるか、さながらに、
別わかれを 惜おしむ わが友ともの
高たかき 岡おかべに 立たてる ごと。

ああ、彼かれ 一ひと歩ぽ、われ 一ひと歩ぽ、
進すすむに つれて、わが體たいも、
みぎは の 蘆あしの葉はに 乘のりて、
引ひかれ行ゆくらん こゝち する。

(五)

あはれ、寂さびしき 海うみのおも、
自然しぜんの さかひ 薄うすらぎて、
限かぎりなき 世よの 悲かなみの
やわらぐ 奥おくぞ 忍しのばるゝ。

ああ、思おもひ見みば、こゝも 亦また、
御法みのりに あかき 淨土院じやうどあん、
『真如しんじよ』の 月つきを 抱いだきつゝ、
最澄さいじやう 眠ねむる ところ かや。

あはれ、ゆかりは紫の
藤波よする樹のかげに、
『知止』の道理を見し人の
神と交はる書院かや。

ああ、また思ふ、草まくら
旅のころもを脱ぎ更へつ、
おのが俳句を楽しみて、
翁のゐますいほりかや。

(六)

げにも、妙なる玉垣の

うちにまします御姿よ。

ああ、貴しやこの社、

誰が祭りけんろの主よ。

圓きかじみは懸け無くも、

おもひに映るさかさ葉や、

水は流れて、而も亦、

かるゝ時なきわだつみよ。

いつの世出で、千斤の

おもき袂をひろげけん。

いづこの果に、たゆみなさ

羽がひの裾は及ぶらん。

人は強いても定まりの
目あてを好むものなれば、
なが名によりて、忽ちに、
異なる魚を呼び起し。

至る處に、なが足の
見わた、這ひ行くおもかげを、
みゆる田畑に侵し入る、
大蛇の如く歌ひ出で。

あしたゆふべの眺めよく、
澄みてゆかしきなが面を、
辨才天になぞらへて、
竹生の島にたてまつり。

月の夜長に鳴る浪の
響を糸にたとへけん、
なが圍りをば繪がき見て、
琵琶湖と唱へ始めけり。

(七)

見よ、夏の頃、その水の

色白ければ、雨となり。
冬、雲湧きて、天上の
山また山は雪模様。

比良八講の風吹かば、
今も法華經となへつゝ、
舟人どもはあらたかの
天狗が岩をかしこみつ。

ああ、恐るべき比叡おろし、
北の舞ひ行く浪立たば、
腰に二本のさむらひも、

隠れ渡航の勇氣なし。

見よや、白浪十重二十重
倒れて、起きて、高まれば、
あらしになやむ大木の
天にさからふ勢よ。

さはさりながら、大わだの
奥なるわだに比へ見よ。
二八月の荒れ時も、
神の無聊をいやすのみ。

洋々たる あわ海の、
ながれよどみし その水よ。
重き力は 三井寺の
鐘に 廣がる、ろの胸よ。

神秘は こもる しき浪の、
深き御かげに いのちあり。
太古のさまの あけ暮れて、
寂しきうちに 光あり。

嗚呼、琵琶のうみ、風なきて、
紫の色 浮ぶ時、
人に 譬へば、とこしへの
やすきを 得たる こゝちかな。

圓き石

この世の苦みをも
かつて嘗めぬわが友、

昔に歸るころ、
之も圓き石ころ。

樂しき空にありて、

嗟、土を踏まぬ足手、

高く飛ぶも飛ばぬも、
凝りて結ぶあま雲。

ネビュラ 冷え氷りて、見よ、

照らす小星の月夜。

圓さに就く靈あり、
自然のまゝ、その態。

いまだ憂ひ悲しみ

もつれ出でぬこの君、

巻くがまゝのから糸。
歌ふものは、赤人の

佛敎 ころに來らず。

人、死の味を知らず、
花のかけに枕し、
眠むるさまを譬ふらし。

暑き時もいくとせ
過ぐる家の庭もせ、
寒き時に會へども、
道に何の毛ごろも。

取りて見えぬその裏、
打てば堅きそのつら。
過去を問へど、示さず。

口なければ、その筈。

棄つれば、また、軽らか、
まろふこともたまさか。
行ふ問へど、語らず。
なさけ無きか、然らず。

雨にぬれて、忽ち、
乾くに早きかたち、
涙もろきものには、
住ひ易きこの庭。



雲 無心にして 出て、
天に かざす ゆふして、
之は 立つ を 憤み、
獨り 神や 見る 意味。

太古の さま 傳はり、
こゝに この 手本 あり、
日にや 新らしき 石、
盡さぬ さちを この岸。

島の歌

あはれ、戀しの 佐渡が島、
翁が 歌ふ 荒海に、
日蓮 ります ものならば、
宗教 いまだ 命 あらん。

あはれ、ゆかしの 隠岐が島、
その身を わぶる 法皇の
御魂 りまさば、 今も 尙
偽忠の人は 耻ぢ死なん。

ああ、久方の 壹岐、對馬、
さかひを 越えて、敵國の
船 押しよする その日にも、
その 犠牲 こそ 憂かるらめ。

ああ、臺灣 は わが 版圖、
千島の 果も 覆ひ羽の、
南北 長さ 島々に
なやめる 人は 幾許ぞ。

ああ、松島の 秋 冴えて、

西行 筆を 投げうちぬ、
竹生の島の 名は 高く、
琵琶湖 に うつる 月のかげ。

ああ、島々は 多けれど、
われに ゆかりの 淡路島、
淡き すがたは 朝じほの
かすむ うちより 現はれつ。

須摩の 濱べの 松風の
夢 吹き拂ふ 故里や、
むかし いませし たらちねの

母の御顔の浮ぶごと。

呼べば、慈愛の手を舉げて、
われを招かんこゝちしつ。
ゑめば、満ち来る新じほに、
わが身の今を問ふごとく。

ああ、われ旅にさまよひて、
つとを納めぬ久しさよ。
十の指をりかぞふとも、
いにし月日は歸り來ず。

わが日の本の島々の
數にわたりて、わが思
千々の亂れを解き分けて、
やすきを給ふ日こそ待て。

有木の別所

(成經が獨語)

松の樹立一むら
低く茂る山かけ、
上を慕ひ、ひたすら
*「厭離穢土」といひたげ。

その麓ふもとに 小高く
盛れる 土よ。なれのみ、
奢る 平家 長らく
ねらひし、人の たのみ。

たとひ むほん とは云へ、
源氏がた の たくらみ、
多く かたらう 家々、
一も 來たり 得がたみ。

うつり易き 花の香、
かはり易き 世の常、

恨み かこつも 愚か、
こゝに 少將 成經。

かへり見れば、かの島、
冲波津 に こと寄せ、
都だより 待つ ひま、
はやも 露の 二とせ。

ながらうてこそは 増され、
胸に 迫る 悲み、
戀ふる 父は 殺され、
何を ひとり 樂み。

おのれ、憎き 清盛、

吉備の國へ われをも

定め置きて、その 宣言

更へし さまの 刈り蒺。

やがて いち門 亂れて、

亡び失せん その時、

榮華の 夢は 覺めて、

あはれ、残らん いへ軒。

ためしは 良き 如意尻、

うたてげなる 賤が家、

障子に さへ しみ入り、

*「欣求淨土」見ぬ かや。

身こそ 思ひ捨てたれ、

いまだ 晴れぬ この胸、

響く 鐘に ほだされ、

日暮に 浮く うき舟。

つなぐ 玉の緒 絶えば、

われは 知らず、山寺

訪ひ來る もの ありせば、

たゞ 古跡 を 見がてら。

あはれ、朽ちし その壁、

しるし はかり この墓。

春の あらし 吹くなべ、

夜もすがら の 谷なか。

噫、 八重もぐら 押し分け、

苔の 上に 手を つき、

いたく 叫ぶ あり明け、

聲 冥途 まで 貫き、

萬事 忘れて 眠むる

君が 耳に 至らば、

噫、一たび 千早振る

神を 起せ、ぬまさば。

われと 入道 康頼、

千重の 卒都婆 の 功德、

かの 鬼界が島 より

渡り來たる この奥。

聖き 風も 常樂、

眞如に 照る 御靈 よ。

既に消えし善悪、

今一返の味かたよ。

ありし昔を語れ、

死に後れしなが子に、

わが誠意に、誰れ誰れ、

數へ擧げよ世の鬼。

島は名のみこわくも、

恐るべきは都よ。

たとひ歸りのぼるも、

こゝろ細きところよ。

さばれ、こゝに参るは

またとかなひ難からん。

この卒都婆を立つるは、

噫、生死の巷ならん。

七日七夜の勤め、

明けてつらき別れや、

まなこ曇るしのめ、

ふたり出づる破れ家。

あはれ、有木の別所よ、

都を去る いく谷。
あはれ、父の居場所よ、
何億里、苔の下に。

*成親、如意尼の古障子に手習ひして、この兩句の
心を示せる跡ありき。

散り行く紅葉

ああ、もみぢ葉のかけ 赤く、
てん地の氣をば 呼吸して、
散り行く さまを 譬ふれば、
その徳 高さ 山人の

こゝろ 静かに、安祥と、
知死期にのぞむすがたかな。

山の立ち樹も、岩が根も、
苔も、草葉も、はた下に
渡せる橋も、小流れも、
ともに縁あるその御弟子。
その悲みを あざやかな
光に放つ ゆかしさよ。

四大分るゝ小あらしに
一葉一葉の舞ひ下る、

蝶か 花かを 水に 浮け。
水は 流れて、その列を、
沖の 舳舻の つづく ごと、
岩間がくれに 運ぶ なり。

ああ、行さき は いづこ ぞや。
われ、その道 を 見守れば、
先きの 船より 消え失せて、
相つぐ ものは 限り なし。
すべて ひじりの 乗る なれば、
他界に 入るや そのまゝに。

天の橋立にて

(昔友とめぐり會へる折)

天神 地神 九世の 戸の
あまの 橋立 ゆふぐれて、
こゝろ 細くも 消え残る
松原 ながさ 浪の音。

つゞみに しては、その昔、
君が 好みし 歌 ならず、
笛とし 聴けば、且は又、

わが 吹き慣れし いろ 出でず。

右に 左に 吹く風 の

ひびき よ、しばし 止みねかし。

千歳の浦 よ、名の 如く、

久しき 友 を なぐさめよ。

ふたり 別れて 十餘年、

わかき さかひ は 夢 ばかり。

海やま 遠く 「時」 の 矢 の

行ふ たづねて、相知らず。

われ は 東に、君 は 西、

さすらふ 空 は 高けれど、

飛びかふ 雲 の 中絶えて、

うれひ に 沈む 世 なりけり。

さばれ、相會ふ この日こそ、

むなしき 月日 よび起し、

老い行く われも いにしへの

わかき に 返へる こゝち すれ。

しづかに うてる わが脈 の

ちしほ に 今や 東風 吹きて、

千々のおもひはわが胸に
うしほの如く湧き出てつ。

わが故郷に、うちつれて、
すいき釣る夜のうれしさも、
之にはいかで増すべきぞ——
旅に來りて、月無くも。

満つる記憶のおのづから
この松原に輝きて、
暗き夜つゆは千萬の
こゝろを照らす光かな。

堇と少女

(お俊傳兵衛の墓に少女
の堇をつむを見て)

なれも宿世は清く
結ぶ露の身なりけん。
白きからだに宿り、
ゆふべに引くかげ二間。

立てる細腰まげて、
かぐむ乙女のすがた。
生れ更らば、同じ

すみれと 咲かん その邊端。

なさけ 深めて 圍む

墓の 底も 練り塚、

冥途に 立つる 家ぞ

多き お俊 傳兵衛。

責むる 勿れよ、世びと、

あらぬ 道の さまよひ。

義理に からむが 爲めに、

罪を いたく その戀。

あはれ、あだなる 心

胸に をどる 防がば、

をんな 形に 追はれ、

その美 つひに 枯れ把。

許すべき ところ あり、

いまだ 盡せぬ いのち、

こゝに 董と かはり、

咲きや 出でし おもゝち。

心して 摘め、をとめ、

人を 誘ふ むらさき。

袖にゆかりの運命

なれにもあり、このとき。

秋吟

(雨中に立ちて)

蛇の目がさ

さしかけて、

歩む道

踏みしめて――

その柄をば

持ちかゆる、

心さへ

降り消ゆる。

雨の音

静かなり、

けさは尙

そのひかり。

見ゆる物

皆あかき、

空の色――

誰が書がき。

傘のへに

散るもみぢ、

ひと葉にも、

この小虹。

里は今

秋深し。

返り見ば、

かの土橋。

二の笛

道のべに 風も凍りて、
寒き夜は 人のかげなし。

家々の 軒に連なる、
瓦斯燈も ねむたげに見ゆ。

月のみは 高く照らして、
やせ犬の おそれ増すなり。

憂々と さわべるの音、
長靴の 巡査過ぎけり。

その跡に 出會へる二人、
『爲吉か。』 『あ』と、立ちどまり。

持つ杖の さきを交して、
手ごたへを 互ひに受けつ。

『仕事は』と 高きが問へば、
『まだ』なりと 低きが答ふ。



「更けては、な、わしは眠たや。」
 「さて、男、いま一まわり。」

高下駄の音 ふみしめて、
 四辻を 右と左へ――

別れ行く 笛の響に、
 あめつちは 親子と聴ゆ。

史 詩

豐

太

閣

われ、豊太閤の事蹟を見て、最も感ずるところはその外征にあり。彼、朝鮮を得れば、大明國に向ひしは勿論、明國を平らげば、印度、ペルシヤ、否々、世界をも討伐せしなるべし。然して、その目的とするところは、かゝる外界の事件にあらざりしなり。彼は、無意識的に、自家心靈の要求を満たさんことを欲せしなり。一國を擧げて、その内部的安心を求め居りしなり。實は、その手段を選ばずして、之に盲進せしなり。されど、われは、光秀征伐時代の秀吉よりも、征韓時代の豊太閤を愛するものなり。先きには、機智あまりに多くして、人の同情を引かず。後には、大愚に似て、而も神々しきところあり。國家の内部的生命を與ふる文藝その物は、知らず識らず、彼に依つて、その眞意を發揮することを得たりと云ふべし。

戦捷の祈

(一)

東南 やうやく 雲 やわらぎて、
西北 はじめて 風 また 静か、
三拾年功 われ 誇らずも、
四海の外まで 威は 及ばんず。
徒手して 天下を 握れるものは、
いにしへ 頼朝、今はた 誰ぞや。
好友、あはれや、世界を 知らず、

富士野の巻狩たゞ止んぬるよ。

(二)

獨立九年の汗馬の勞も、
なほ且幕下に英雄さかえ、
勢さながら大わたつみの
泡立つ如くに、ああ、鳴り響く。
肉飛び、骨さけ、氣は碎くるも、
堂々この士をいかんが黙す。
微力に起れるこのわが身には
關白何ぞや、早や投げうちぬ。

(三)

去年のこの日に諸侯を集め、
聚樂の屋形に外征を議す。
五人の宿老、五人の奉行、
中老三名、みな列なりつ。
備前の宰相満坐に代り、
讃辭を呈して異議なくありき。
十萬貔貅は直ぐ立ちどころ、
艦船七百われ今率さゆ。

(四)

人間 僅かに 百歳 ならず、
快ならざらん や 無前の いくさ。
美々たる 戦袍 われ人 かざし、
金銀 珠玉 の 大刀 佩かして、
大軍 肅々 旗幟 を たし、
雞林八道、明洲四百、
暹羅、晨且 をも 一つに 統べば、
やまと の 言葉 を 西夷 に 擬せん。

(五)

邊境、日本の 土のみ 踏んで、
いつまで 祖先 の 武烈 を 瀆す。

京師 は 主上の まします ところ、
豈、ろれ、畿内に 踟躕せん や。
歡慮を うつして 北京 に 迎へ、
大唐關白 これ 秀次 か、
故國 は 秀家、高麗 には 岐阜 の
宰相 秀信、最も よけん。

(六)

ついで、老將 また 舊臣 の
いさを に 報いて 國々 取らせ、
宇内の 形勢 たとへば 春の
うな原 廣くも とく 治まらば、

わが身は身づから愛兒を追ふて、
とこ世の御國の神とぞ成らん。
露とも消え行く浮世の中の
のすみは、ろの他に、またあるべしや。

(七)

元來無物のわが身の上は、
有形の野心は國家の爲めぞ。
限りを知らざるこのあめ地と、
誰れかは空しくながらふべけん。
鶴松三歳をさなく逝いて、
悲痛の靈境われ感じ得ぬ。

清水塔上古今をいたみ、
丈夫の本領その時決す。

(八)

ああ、われ賤しくおひ立ちぬれど、
日輪孕みて産れし子なり、
普天のもと、また率士の濱に、
多年の思を遂げてや止まん。
今上皇帝且上皇に
拜別終はりて、親兵二萬、
文祿元年卯月のなかば、
秀吉來たつてこの社にいのる。

(九)

噫、いつく島がみ、往古に渡り、
 潮路を守護する御霊と稱す。
 われらが出で行く前軍後備、
 靈験いやちこあらしめ玉へ。
 げにこれ仙島、岸うつ波も
 心耳を洗つて梵唄の曲
 やがては攻め入るかのむらさきの
 龍宮城もま近し、あら、ありがたや。

(十)

供養の萬燈つき夜の如く、
 海上遠くも光はをどる、
 百折廻廊舞樂と變じ、
 われまた登仙羽化するものか。
 虚空に花ふり、蝶あらはれて、
 御代泰平とぞ、歌ひてかなづ。
 ほとけの王國、異教の土にも、
 わが目は開らけて、冥福浮ぶ。

(十一)

ああ、われ賤しくおひ立ちぬれど、
 日輪孕みて産れし子なり。

普天のもと、また率土の濱に、
多年の思を遂げてや止まん。
噫、いつく島がみ、往古に渡り、
潮路を守護する御靈と稱す、
われらが出で行く前軍後備、
靈驗 いやちこ あらしめ玉へ。

清正望岳賦

朝鮮北境いま早や盡きて、
攻め入るあなたぞかの元良哈、
八千騎兵はいち城抜きつ、

貨寶を收めて南に還る。
追撃胡兵の鋒さき迎へ、
清正身づからしんがりすなり。

時、これ、當年七月なかば、
五穀もみのらぬ異邦の風よ。
夏なほ寒きは、日本刀の
切れ味さとして、靡けるさまか。
王子は兄弟俘虜となりつ、
知らずや、咸鏡南部にあらん。

無謀のしれものいのちを忘れ、

夜叉上官ヤシヤウワンをば おそひて 來たる。
たやすく あしらひ、且かつ 退しりぞきて、
進むは いよいよ 平安道へいあんどうか。
わが軍ぐん たまたま 道みち 失うしなひて、
浪なみ 蒼茫さうぼうたる 海うみべに 出いでてぬ。

二十重にじゅうじゅうの しき浪なみ 御空みそらの 雲くもに
つらなる 境さかいは 如何いかなる 國くにぞ。
噫あ、さなきだに、又また 征衣せいゐを 着きては、
生なまれし 故郷こきやうの 戀こひしき ものを、
見みよ、見みよ、西南せいなん 霞かすみを 開ひらき、
はるかに 浮うかべる わが 富士ふじの 靈れい。

譬たとへば、暗夜あんやを 迷まよへる 船ふねの
北斗ほくとに みよしを 轉てんずる 如ごとく、
従したがふ 兵士へいしは 皆みな もろ共に
芙蓉ふようの すがたを 動うごかぬ 目めあて。
將軍しやうぐん よろこび 馬うまより 下くだり、
かぶとを 脱たつして、再拜さいはい 跪坐きざす。

『ああ、われ、貴たかとき 義父ちち、太閤たいかうの
御もとを 半歳はんさい 辭じし 奉たてまつり、
日々 向むかふは たゞ 西北せいほくと
思おもひし ことこそ 過あやまち なれや。

遠くも 來にける われらが いくさ、
わが 大日本 ばかりの 空ぞ。

『勝利の しらせ を 待つらん 人の
あり とし 頼めば、いづこの 果も、
われには 聚樂の たゞ あたたかさ
御殿に 同じ』と、かしくみ 起きつ。
再び 馬上に 士を 見渡せば、
さほひ は 凜々 あらたに 振ふ。

明使追放

(一)

金箔 粲たる 瓦を 葺いて、
光明 あまねき 伏見の城 よ。
たたみ は 千疊錦を かざし、
柱に 大和の 古木ぞ ひかる。
『殺生關白』 先年 逝いて、
棄君 この時 僅かに 四歳。
天下の 大將 平和を のぞみ、

ここ、今、明使を引見すなり。

(二)

毛利の輝元兵士を列ね、
二行の護衛は厳しくゆたか、
警驛静かに帷幄は開け、
太閤七士とすまひをただす。
正副明使は仰ぎも得せず、
人手にすがりて御前に進む。
膝行ささぐるその禮物は、
金印冕服いかなるしるし。

(三)

天下はよろこび、家康以下に
その章服をばおのちの着させ、
手づからかむりをおし載いて、
袖ひろごろものいきほひ揚る。
仰せをかしこみ、かの墨染の
承発冊書を読み上げはじむ。
あはれや、冒頭その語に曰く、
『なんぢを封じて日本の國王――』

(四)

行長 なたへに おののき 懼れ、
列坐 の 英雄 一語 を 吐かず。
秀吉 忽ち まなじり 裂けつ、
排服 は 破れて かんむり 飛びぬ。
『われ 今 日本 を 手中 に 握る、
王位 を 欲せば 身づから 可なり、
皇統 綿々 この 天朝 に、
夷狄 の 馭言は 以ての外ぞ。』

(五)

『ああ、人、われ をば 小猿 と 稱す、
まことに かなへり この わが様 は。』

無禮 の 文字 を 得んとて、ここに
なんぢら 風情 を 引見 せんや。
惟敬 は 奸悪、詐謀 を いだき、
明韓 二國 を 取りつくろふ か、
攝津 は 小才、恥辱 を 知らず、
その罪 いづれも 誅死 に 當る。

(六)

『阿虎 は、直ちに、奉行の衆 と
兩使 を 鞭うち、とく 去らしめよ。
方亨、なんぢ は 何を か 爲さん、
北京 に 歸りて、わが意 を 告げよ。』

秀吉 怒つて 大師 を 出だし、
再び 内地 に 進撃 すべし。
朝鮮 三道 わが目 に あらず、
明州 四百 を 屠るは 近し。

(七)

『ああ、われ 愚なりや。この 鬱忿 は、
諸公 と もろ共、豈 忍ばんや。
西南四道 の 勇士 を 募り、
明年 二月 を 發途 と なさん。
秀秋、このたび 主將 と なりて、
秀家、秀元、その副 たれよ。』

小西 は 阿虎 と 先鋒 きそひ、
この あやまち をば 千古 に ただせ。』

(八)

金箔 粲たる 瓦 を 葺いて、
光明 あまねき 伏見の城 よ。
たたみ は 千疊 錦 を かざし、
柱 に 大和 の 古木 ぞ ひかる。
數百 の 兵船、十萬 貳貅、
東西 四方 を 意中 に 收め、
天下 の 大將 媾和 を 遂げず、
ここ、今、明使 を 追放 すなり。

64

蔚山城

大明、諸道のつは者集め、

三十三將いさほひ奢る。

右軍は芳春、左軍は如梅、

高策その間中軍ひきゆ。

韓國七將また加はりて、

蔚山修築なかばに追る。

たまたま嚴寒、しはすの空に、

草木いのちのかをりを吐かず。

守將は水路の堡寨に出で、

城兵一しほ土木に努む。

土をば重ねて水盛りかけば、

數丈の銀壁忽ち成りぬ。

將軍奮戰歸るといへど、

四面は全く敵手に落ちつ。

十日の籠城、十日の飢渴、

牛馬を屠つてその數足らず。

血しほの氷を碎いて食みて、

釜山の援兵至るを待てり。

黒田の孝高梁山に在り、

使^{つかひ}を發^{はつ}して危^き急^いを報^{ほう}ず。
豊^{とよ}臣^み秀^{ひで}秋^{あき} 諸^{しよ}將^{しやう}を督^{とく}し、
五^ご萬^{まん}の騎^き卒^{そつ}は勇^{いさ}んで進^{すす}む。
清^{きよ}正^{まさ} さながらその意^い氣^き 自^じ若^{やく}、
内^{ない}外^{がい} 應^{おう}じて、相^{あひ}合^が擊^{げき}す。

30
敵^{てき}軍^{ぐん} 三^{さん}脇^{わき} あなみは亂^{みだ}れ、
總^{そう}督^{とく} 揚^{やう}鎬^{ごう} 今^{いま}早^{はや}やいづこ。
夜^よさむの平^{へい}原^{げん}、露^ろ營^{えい}は倒^{たふ}れ、
凱^{がい}歌^かの響^{ひび}は千^ち里^りに渡^{わた}る。
月^{げつ}色^{しよく} 皓^{こう}々^く 根^ね城^{じやう}と映^あじ、
殘^{ざん}兵^{べい} 却^{かへ}つて行^{ゆく}急^いに迷^{まよ}ふ。

薨 去

(一)

六^む十^{じゆ}三^{さん}歳^{さい} 太^{たい}閻^い 老^おいて、
外^{ぐわい}國^{こく} いまだに降^{くだ}りを乞^こはず、
四^し屯^{とん}の精^{せい}兵^{へい} 四^し城^{じやう}を守^{まも}り、
その餘^よは全^{ぜん}くまかりて歸^{かへ}る。
七^{しち}年^{ねん}征^{せい}役^{えき} かへり見^みすれば、
過^すぎにし 醜^{たう}醜^ごの豪^{ごう}遊^{ゆう}のみか。
花^{はな} またこの世^よに散^ちり行^{ゆく}く習^なひ、

殿下の病はいよいよ篤し。

(二)

この時 八月、徳川公を

御もとに招きて、のたまひけらく。

『われ、意を果さて、且死に失せば、

中將 幼弱、世に亂あらん。

之をばをさへて 鎮めんものは、

重鎮、なんぢの外あるべしや。

幼兒の行ふはわれまた問はじ、

天下を擧つてなが手に托す。』

(三)

家康 老耄、なほ且おそれ、

感佩 追つて なんだにむせぶ。

『殿下の百歳 萬世の後は、

嗣君を奉ぜぬものらぞなけん。

よろしく 神算、君、運らして、

治國のもとのを遺させ玉へ。

われたゞ不才の身は、畏くも、

ああ、この重任 堪ゆべくもなし。』

(四)

ためらひ 退く あと 見送りて、
三成 長盛 諫めて 曰く、

『殿下 は 百戦 天下 を 握り、

一朝 他人 に 與ふは 如何に。

諸侯 に 大小 差別 は あれど、

すべて は 御恩 に むせべる ものぞ。

從二位 の 幼君 まささく ませば、

關西 關東 など 叛かん や。』

(五)

衆議 に 從ひ、すなはち、こゝに、

大老 中老 奉行 を 命じ、

片桐且元、小出 の 播摩、

秀頼 傳 たるに これ 定まりぬ。

多年 の 老臣 猛將 ども を

御枕 近くも 皆 召し寄せつ。

『ああ、わか戦 勝ざる なきも、

今、たゞ、一事 を 遂げずに 逝くか。

(六)

『爵勅 そびゆる 大樹 の かげも、

えだ葉 を 刻めば 残るは 幹 ぞ。

魏々たる いらかを 支ふる ものは、

ふとしき立つ てふ かの 宮ばしら。

一人 天下の重きを成さば、
萬民等しくつどひて來たる。
見よ、われ日本の御靈を受けて、
平和を世界の果まで求む。

(七)

『劔銃、弓矢は露電に似たり、
一たび動けば、歴史と消えん。
めぐりて倦まざる天にも、地にも、
人々一期の心は振ふ。
たとへばこの精、うしほの如く、
満ち足る世までは平らかならじ。』

四民のわづらひ、四民のうれひ、
ああ、半途にしてわが手を免る。

(八)

『明國、わが死を若し漏れ聞かば、
或は大舉の復讐あらん。
元寇以來の恥辱を受けば、
われこの御國に神さび得んや。
駿河の宰相伏見に臨み、
必らず内外歸趣を示せ。
六歳嬰兒は大坂城に
利家保ちて、人たらしめよ。』

(九)

『石田よ、浅野よ、とく赴きて、
 四城のいくさを收めて歸れ。
 二人の宰相そなへに立てば、
 追撃何ぞや、おそるに足らず。
 十萬兵士を空しく置いて、
 あはれや、異境の鬼たらすな』と、
 天下の大將一事を遂げず、
 千古のうらみをいだいて逝きぬ。

小海祠

天下の訃音を敵漏れ聞いて、
 窮鼠のいきほひ却て猛し。
 わが軍海路をせさとめられて、
 義弘僅かに唐島に入る。
 順天守將は南海島の
 義智古城にのぼつて守る。
 明將劉綎わが船沈め、
 入り江を封じて次第に迫る。

釜中の魚たる行長勢は、
暗夜に乗じて闘みをのがれ、
時これ霜月十有九日、
島津と合して名護屋に向ふ。

一兵その名は高宮小八、
端なく後れて、便船を得ず。
濱べにうち出で、その西みなみ、
故郷の空をば空しくながむ。
卑怯の浦人身を遠ざけて、
たゞ攻め寄するはおほ浪ばかり。

小八がよそへる黒革おどし、
よろひは破れてつじれのまゝに、
やすらふ家なく、食らはん實なく、
なぎなた一つを夜襲の備へ。
あはれや、俊寛、敵地にありて、
風雨は無情の手がらを誇る。

韓人わらべはこと更ら避けて、
そのちち母らの門戸を出でず。
かの夜叉上官、また石曼子、
武勇の言葉をひそかに偲ぶ。
見よ、見よ、この士は瘦せ衰へて、

失せにし その日に わだつみ 荒れぬ。

再び 難事の 返るを 恐れ、

島民 やしろを 小山に 建てつ。

時日を 定めて、あらぶる神の

御魂を 鎮むる 祭を なせど、

歴史は 亂れて、かれ 舜臣の

愍忠海祠の 一つに 數ふ。

夕
潮
終

明治三十七年十二月一日印刷
明治三十七年十二月五日發行

複製
不許

定價參拾五錢
郵稅金六錢

著者 岩野美衛
東京市芝區西久保八幡町九番地

發行者 日高藤兵衛
東京市本郷區元富士町二番地

印刷者 白土幸力
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三光堂
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所 日高有隣堂
東京市本郷區元富士町二番地

明治三十七年十一月廿五日印刷
新刊發行の都度増補訂正す

有隣堂出版書目

東京市本郷區元富士町二番地

日高有隣堂

主意書

理想と光明とを緯となし、趣味と利用とを經となし、宗教、哲學、倫理に、史傳に、戯曲に、小説に又緊急問題に就きての人物に、苟しくも文明の増進と風教の醇化に大なる功益あるものは其の大家名流たると壯快なる新進文士たるとを問はず、其の玉稿を請ふて出版せんとす是れ本堂の主義也。此の故に本堂は全國各位の愛顧を蒙り御信用を得んが爲めに本堂出版の新刊書籍に對する新聞雑誌の精評を掲げ御觀覽に供し來たり候も漸次増加し其數多くして載せ盡す事不能不得止出版書目而己を掲げ御觀覽に供し御注文を仰ぐことゝしたり。請ふ其の意を諒せられんことを。

萬朝報記者華山茅原廉太郎著

向上の一路

定價金六十錢

郵税金拾錢

本書の内容は略左の如し

第一篇

社會主義の新福音(上)

安部磯雄氏の『社會問題解釋法』を読む
本編に於ては、縦横に舊派の社會主義に向て、高等批評を試み、殆ど完膚なからしめたり

第二篇

社會主義の新福音(下)

本編に於ては、著者の新社會主義を經濟學、社會學進化論、倫理哲學上より説明して、社會主義に對する新なる福音を宣傳せり、蓋し我國に於ては、破天荒の學說なり

第三篇

個體責任編

本編は「個體責任編」と稱し、著者が流麗自在なる、光明博大な言論を集めたるもの、プロフェサー、ウーレル氏の論文及び英獨佛の新聞紙を根據として極東の將來を論じたる一大雄編の如きは、眞に燭眼炬の如きものあり、其他早稻田大學雄辯會に於ける演説は、マハン大佐の議論を根據として、極

東戰局を明白にし、人をしして襟を正さしむるものあり、長短の論文、美文錯綜し、英雄首を回らせは、即ち神仙の概あり

第四篇

本編は「生命一體編」と稱し、著者が師友の意見を集録したるものなり、**黒岩周六、圓城寺天山、松井伯軒、倉辻白蛇、松居松葉、伊藤銀月、田口掬汀、諸氏より森槐南、柿崎文學博士、菊池哲學博士、江木法學博士、内藤鳴雪、佐々木信綱、三宅克己、齊藤松州、徳永柳洲、井口あぐり女史等に及ぶ**

第五篇

本編は「人生批評編」と稱し、青年の修養に資せんが爲に、和漢洋詩を撰びたるもの、**森槐南、岩溪裳川二氏は漢詩、佐々木信綱氏は歌、平木白星氏は新體詩、佐藤紅綠氏は俳句、山縣五十雄氏は英詩を擔當**別に著者の意見を添へたり

高橋五郎著

杜伯品藻

定價卅五錢

郵稅六錢

トルストイ伯の人物主義を評す

一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如くす著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縱横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其嫵妍得失一目瞭然真理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評隲する而已ならんや○讀書子愛讀の榮を賜へ



文學士 大町桂川先生書翰 木村鷹太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 前田林外先生書翰
岩野 泡鳴著 青木繁先生書

新集体夕潮

定價三十五錢

郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏して、うちに無窮の悲觀を備ふる而してその行文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、



海老名彈正先生著

基督教本義

○上製 六十五錢

○並製 郵稅十錢

○並製 郵稅八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識勇健の筆を以て上はモーゼより下ルーテル、シュライエルマツヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ



文科 文學士夏目金之助先生 校閱
大學 文學士上田敏先生 序文
講師 アイサー、ロイド先生
チャールズ、ラム著 文學士小松武治譯

訂正 沙翁物語集

定價七十錢

郵稅十錢

●上製クローヌ四百數十頁頗る美本

古英雄亞歷山陣中に在りて常にハーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨壁シェークスピアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる翻譯を誠み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戯曲の何たるやを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべきの書也

東京外國語
學校教授 山口小太郎先生題詩
蘆風秋元喜久雄譯

訂正 獨逸 定價卅五錢
三版 詩粹 紛紅集 郵稅四 錢

美術的製本

ゲーテ、シルレル、ケルテル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精真なる筆を以て、翻譯したるもの、一句一字の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はしく遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、翳勃たる香氣、人をして醉はしむるが如きもの集まつて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。



海老名彈正先生著

再版 宗教々育觀 定價五十五錢
郵稅 八 錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂麻を截つの感あらしむ而かも本書の内容は單に教育問題に限らず宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるもの實に濔々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して本書の光焰に接せよ

* * * * *

苦學社社輯

苦學の伴侶

定價三十錢
郵稅四 錢

生活の道に往き艱める苦學生は此の書を讀め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我國現時の諸大家の成效の秘訣を知らんと欲する者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父の聲咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦學古今誰か苦學せずして成效したる者やある苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たりと謂ふべし請ふ諸君一本を座右に供せられんことを



海老名彈正先生著

人道

定價十錢
郵稅二 錢

先生時局に關し大に感慨するところあり其の豫言者的熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す乃ち逐次戰時叢書を刊行して宗教家の戰爭觀を告白せんとす是れ其第一卷なり雷に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子なり弊堂毎卷數萬を印刷して廣く世上の需要に應せんとす幸に陸續注文を賜へ

228
229
230

加藤直士先生譯

トルストイの 日露戦争観

●定價金三十錢 ●郵税金四錢

露國巨人トルストイ伯が今回の日露戦争に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫敦タイムスに於て「日露戦争観」と題する一大論文を掲げて最も雄渾痛切に其詳細なる意見を發表したり今や邦人鶴首して其内容の全斑を知らんと欲する時に際して翁紹介者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

横山筆助著

再版 成功したる催眠暗示術 應用自在

●定價三十錢 ●郵税金四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖、大抵不充分なる譯書、實際に益なき空論的なるもののみ多し、之に反して本書は經驗に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新の學理と諸種の方法とを参考して何人にも理解し得るよう又極めて懇切に述べられたるものなり、且つ加ふるに興味ある實驗書を以てす、本書出でて、我が催眠術界の知識すること必ず大ならん、好學の諸君御愛讀あらんことを。

匿名隱士著

六版 破天人論

定價參拾錢 郵税四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞紙雜誌の大好評を博せり出版日尙淺きに不拘既に六版を印刷せり以て本書が如何に愛讀せらるゝやを知るべし



齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

●定價金參拾錢 ●郵税金四錢

トルストイの宗教論や、大作小説や、洵に是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる所以蓋し茲にあらん。然れども人は狂瀾怒濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水を樂しまざるべからず。深林巨巖を賞すると共に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪が、如何に諄々として、天使の如き聲を以て、博愛、自然、自由、労働の大々的福音を鼓吹するかを視ん。

女子高等師範學校講師 文學士 尾上柴舟先生序
 華族女學校監 下田歌子女史題歌
 鈴木 秋子 女史 著

再版

軍國の婦人

●定價金廿八錢 ●郵税金四錢

戦争の裏面に婦人あり戦争は男子のみにて
 なすものと云ふものは未だ以て今日の時局
 を語るべからず本書は實に婦人が戦時に於
 てなすべき活動の方法及び戦争と婦人との
 天賦を説きたるものにして事勢に適切なる
 事は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を
 力むるものは必ず一讀せざるべからざるの
 書也



大 賣 捌

- | | | | |
|------------|-------|---------------|-------|
| 東京京橋區尾張町 | 警 醒 社 | 筑後久留米市 | 菊竹 書店 |
| 東京神田區表神保町 | 東 京 堂 | 静岡市 | 吉見 書店 |
| 東京神田裏神保町 | 上 田 屋 | 横濱市 | 弘 集 堂 |
| 東京日本橋筋屋町 | 前 川 | 同 | 有 隣 堂 |
| 東京神田表神保町 | 修 學 堂 | 同 | 勉 强 堂 |
| 大阪心齋橋南久太郎町 | 福 音 社 | 同 | 倉 田 屋 |
| 大阪南本町座摩ノ前 | 杉本 書店 | 信州長野市大門町 | 西澤喜太郎 |
| 大阪備後町四丁目 | 吉岡 平助 | 信州松本本町 | 松 榮 堂 |
| 神戸市 | 吉岡 支店 | 信州諏訪町 | 日 進 堂 |
| 京都三條寺町 | 聖 書 房 | 仙臺市新傳馬町 | 紀 港 堂 |
| 京都二條寺町 | 若林 書店 | 陸中一ノ關町 | 佐藤 喜平 |
| 廣島市 | 積 善 館 | 陸奥弘前市土手町 | 今泉道太郎 |
| 岡山市岡山町 | 奥田金昌堂 | 青森市米町 | 同 支 店 |
| 周防國岩國町 | 白金日新堂 | 秋田市曙町 | 成見清兵衛 |
| 山口大町 | 同 支 店 | 北海道函館相生町 | 福 音 社 |
| 熊本市新町二丁目 | 長崎 次郎 | 北海道札幌區南一條西二丁目 | 富 貴 堂 |
| 鹿児島市松山通り仲町 | 久永 新藏 | | |

大寶冊

卷之...

...

...

...

